ZWEIGEN HEROZ

MONTHLY MAGAZINE "ZWEIGEN HEROZ"

OCT 10
2022
vol.24
2022年10月10日発行

ZWEIGEN PLAYERS

KANAZAWA OFFICIAL SUPPORTER'S MAGAZINE

自身のポジション

ZWEIGEN PLAYERS

ZWEIGEN KANAZAWA ★ ZWEIGEN KANAZAWA ★ ZWEIGEN KANAZAWA ★

www.zweigen-kanazawa.jp

ニュースパイラルは
ツエーゲン金沢を
応援しています。

Estd 2006
Zweigen Kanazawa

×

NewSpiral

ザ・ニュースパイラル出版の出版物はこちら

NEW SPIRAL PUBLISHING　商品詳細は特設サイトへ

https://newspiralbook.com/index.html

ZWEIGEN HEROZ
2022. OCTOBER NO.24
CONTENTS

「自身のポジション」

松本 大弥 選手 ゴールを決めるポジショニング 4

スタジアム学園祭 2022

スタジアム学園祭 2022 - 学生のためのイベントで人を繋ぐ - 12

開催レポート 16

もしもツエーゲン金沢の選手たちが学校の先生だったら 22

クラブ初となるシーズン途中のコンセプトショップ 24

この街で最高の観戦体験を 34

コラム◉ しんじのじかん｜辻尾 真二 41

「HEROZ」パートナー企業インタビュー
本田鉄工株式会社 本田 誠一 代表取締役社長 42

MY ZWEIGEN STORY 「ツエーゲン金沢との出会い」 44

STAFF LIST
Publisher：株式会社ニュースパイラル
Editor in Chief & Creative director：加藤 有視
Editor：村田 亘・吉田 和広・岩城 由彦
Writer：村田 亘
Designers：中野 優花里
PHOTOS：藤森 祐治
COVER DESIGN：JAPON DESIGN WORKS
発行所：株式会社ニュースパイラル
発行元：株式会社石川ツエーゲン / ツエーゲン金沢

Hiroya MATSUMOTO

ゴールを決めるポジショニング

サッカーで点を取るポジションと言えば、やはりフォワードを思い浮かべることだろう。しかし、中盤やディフェンダーにも常にゴールを狙う選手がいる。今季、広島から期限付き移籍加入した松本大弥もそのひとり。
プロ入りしてからはなかなかゴールを決めることができずにいたが、今季はなんと5得点決めている。(9/20時点)彼のなかに起きている変化と成長とは。

松本 大弥 MF 6

たのは、いつ頃からですか?

「中学2年の頃からで、高校に入ってからはいろんなポジションをやりながら、3年のときはボランチでずっと出ていました」

——プロに入ってからは、どのポジションが多かったんですか?

「広島のときはボランチの層が厚かったので、あまりやる機会はなくて、ウイングバックとかセンターバックが多かったですね。大宮でもサイドバックとかでプレーしていました」

——金沢ではボランチでプレーすることが多かったですが、最近は左サイドハーフでもプレーしています。それぞれのポジションでプレーする際に意識の違いなどはありますか?

「サイドハーフだと少し前の選手になるので裏に抜けることも必要になってきます。自陣にボールがあるときはできるだけ近くでサポートして、敵陣に運んだときには裏のスペースを見ながら、そこに走ることも意識しています」

——ホームの長崎戦では途中からサイドハーフに移りましたが、最終盤でも長い距離を走って飛び出していきましたよね。

「常に意識はしていますね。長崎は裏にスペースがあったので走れましたけ

ポジションの変遷

——今回は「ポジション」へのこだわりについて聞きたいと思います。大弥選手はツエーゲンでもボランチや左サイドハーフなど、いくつかのポジションで活躍していますが、これまでもいろんなポジションをこなしてきたと聞いています。

「広島のときはセンターバック、ウイングバック、ボランチ、フォワードがいないときはフォワードもやっていました」

——フォワードというのはシャドーとか一列下がったところですか?

「シャドーも数回ありますし、ワントップもやっていました。基本的に全部のポジションをやっていると思います」

——ご自身が最も適しているなと思うポジションはどこですか?

「ボランチ、中央ですね」

——ボランチでプレーするようになっ

ど、あまり裏のスペースがないチームもあるので、そういったチームを相手にしたときには、また違うプレーが必要になってきます」

――長崎戦では、右サイドに行って、あまりスペースがなくても裏に走ったプレーも印象的でした。

「ありましたね。左にいる選手が右に行くと、相手も捕まえられなくなるので、そういうところは狙っています」

――左サイドハーフに入ったときには、監督から特にこうしてほしいという要求があったりするんですか？

「裏を取れそうなときは裏に走ってほしいということと、自陣でボールを繋いでいるときはできるだけ距離を近くしてほしいということぐらいですね」

――サイドと中央だと見える景色も違うと思いますが？

「景色については、サイドでもあまり違和感はないですね。どのポジションでも相手の嫌なことをしようと思っているぐらいです」

ゴールへの意識

――最近（インタビューは9月8日）はゴールを決めることも多いですが、プロになった当初はあまり多い方ではなかったですよね。

「プロに入ってからの3年間はリーグ戦ではゴールがなかったですね」

――今シーズンは第31節以降の4試合で3ゴールです。得点への意識は強くなっているんですか？

「もともとシュートのパンチ力は持ち味なので、ゴールに対して強い意識を持っていました。高3のときはプレミアリーグで7点取ったんですけど、プロになってからはなかなかゴールができませんでした」

――ここにきて点を取れるようになったのは、自身のなかでどんな変化があったんですか？

「ゴールを決められる位置にポジションをとれているということが、大きな要因かなと思います。もちろん以前からポジショニングは意識していましたけど、以前よりも少し高い位置でボールを要求することができていてシュートシーンを多くつくれているというのが、一つのポイントですね」

――現時点でシュート数もチームで2位と、足を振る意識は強いですね。

「はい、もともとシュートの意識は高いと思います」

――では、（映像を見ながら）ここまでの4ゴールを振り返っていきたいと思います。まずは第7節、熊本戦の初ゴールです。

「最初は長峰（祐斗）選手からクロスが上がってきたところに合わせようと思っていたんですけど、そのときはボールが自分の頭を越えていきました。折り返しが来るかなと思って準備をしていたら自分のところにボールが来たので、きっちりと当てることだけを意識して打ちました」

――相手のディフェンスもキーパーもいましたが、キーパーの股を抜けて入りました。

「このときはコースはあまり狙っていなくて、枠内に入れることだけに集中していました。とにかくボールをミートさせることを意識しました」

――金沢での初ゴールでしたが、どんな気持ちでしたか？

「やっと点が取れたなと。Jリーグでの初ゴールでしたし、（3年間）点が取れていなかったので、久しぶりにゴールを決めることができてよかったなという気持ちでしたね」

――そして第31節以降、怒涛のようにゴールを決めていきます。まずはアウェイ山形戦のゴールを振り返ってください。

「小野原（和哉）選手がボールを持って前を見たときに、フォワード（丹羽詩温）にパスが出るだろうなと。なので僕は、3人目の動きでボールを受けようと考えて前に走りました。そうしたら思った通り良いボールがフォワードに入ったので、『この後は自分にパスが来る』と思って準備しました。ボールを受けたときに中にスペースがあったのでドリブルで運んで、逆から相手ディフェンダーが来ているのも見えたんですけど距離があったので、ペナルティエリアの角付近で一旦スピードを落としてファーにシュートを打ちました」

――迷いなくシュートの選択ができたんですね。

「思ったより余裕があったし、相手のプレッシャーもあまり感じなかったので、少しスピードを落として落ち着いて打ってみようということですね」

――3人目の動きを意識したということですが、連敗していた時期はチームとして、そういう動きも減っていたように思います。

「そうですね。そのあとの長崎戦でも同じような形が1本あったんですけど、そのときは林（誠道）選手がパスを出してくれませんでした（笑）」

――3点目は続く甲府戦でしたね。

「甲府戦も、小野原選手が持ったときにパスコースが見えていたので、3人目でもらおうと思って走りました。自分がパスを受けたときに最初のタッチが少し大きくなってしまったので、打とうかどうか迷ったんですけど、思い切って打ってやろうと思って打ったらラッキーな形で（相手に当たって）入りました」

――このときは左足でしたが、遠くからでも左足を振ることはずっと多かったですよね。

「そうですね。左足も右と同じぐらい強いパンチを持っているので、ファーストタッチが決まれば打ちます」

――長崎戦が中止になったため少し時間は空きましたが2試合連続ゴールでした。

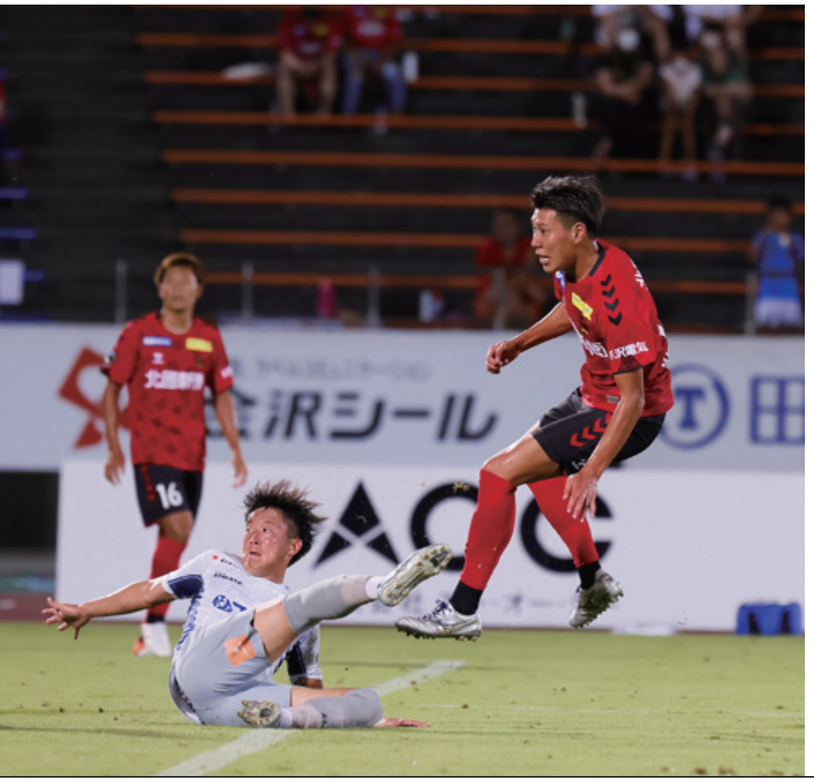
「プロになって初めてだったので嬉しかったです」

――そして4点目は1試合おいて、第32節の長崎戦です。この試合は3点差を追いかける苦しい展開でした。大弥選手のゴールは丹羽選手が1点返した直後でしたね。

「ビハインドでも全然諦めていませんでしたし、勢いに乗って立て続けにゴールを決めたいなと思っていました。このゴールでかなり良い流れになったかなと思います」

――では、こちらのゴールもご自身で解説をお願いします。

「最初は長峰選手からのパスをスペースでもらおうと思っていたんですけど、相手がコースを切っていたので、次の



Hirova MATSUMOTO

サンプルはここまで

ZWEIGEN HEROZ 10月号

2022 No.24

980円（送料180円）

続きが読みたい方はこちら！ 〉